

高橋悠介氏の論文『金春禅竹の能楽論研究—荒神をめぐる思想と六輪一露説』は、後期の世阿弥の思想的影響を受けながらも、きわめて独創的な展開を示す金春禅竹の能楽論および宗教思想の解明をめざすものである。

禅竹の、能楽をめぐる思想の極は二つある。一つは『明宿集』に示される独自の「翁」観であり、もう一つは〈禅竹曼荼羅〉ともいうべき六輪一露説の図像および関係諸言説である。高橋氏は、この二つの極の間を、『明宿集』で強調される「荒神」をクローズアップすることで、つなごうと試みている。

本論文は四部構成で、現在に至る金春禅竹研究を概観する第一部が序論であり、第二部から第四部が本論である。

本論のうち第二部「猿楽の神としての翁と荒神」で、「荒神」が大きく取り上げられ、それは禅竹能楽論を読み込む基礎作業としての「荒神」論と位置づけられる。

第二部第一章では、猿楽が荒神と関わっていく歴史的経緯が「方堅（ほうがため）」という呪術芸の側面からたどられ、第二章では、『荒神縁起』というテキストの分析などから荒神信仰の発生と展開がたどられ、第三章では、室町期南都の荒神信仰とくに長谷寺奥の笠山荒神に注目することで、金春座の祖先秦河勝が初瀬川から湧出したとする禅竹の猿楽起源説の背景が提示される。第四章では、荒神の両義的性格（二相一如論）や胞衣神、根源神としての性格の、禅竹の「翁」観への投影が語られる。

第三部「円満井座の伝承と禅竹の信仰の諸相」は、禅竹が所属する円満井座（金春座）の三宝、宿神御影、舍利、鬼面のうち、舍利と宿神御影についての分析が中心である。宿神御影についての第五賞では、宿神に関わる星宿信仰と荒神信仰との結びつきが指摘される。荒神の両義的性格は、翁と鬼を一体と捉える禅竹的嗜好のベースとなるものだが、それだけでなく、第六章では、『明宿集』に見られる、汎神論的な翁の性格、翁の遍在説という禅竹的思考に関して、宝珠と一体となる舍利を仏性・菩提心の象徴とし、これが法界に遍満するという観念をベースにしたものであろう、との推定がなされている。また同章では、荒神とも一体化する局面をもつ舎利のあり方の分析が行われる。第三部では、主として第五章で、舎利をめぐる言説が南都の西大寺流律宗を經由して流布することが示されるが、第七章でも律宗の言説を媒介に、「橘の内裏」で秦河勝が猿楽を演じたという猿楽起源説の背景が明かされている。

第四部『六輪一露』という表象は、禅竹思想の本丸、六輪一露説へのアプローチである。第四部第八章は、禅竹が六輪最初の寿輪を、万物を生む「器」としたことについて、世阿弥が『遊楽習道風見』において禅の言説の影響下、舞台上の景色を生み出す「一心」を天下の「器」と捉えたことからの発展であると指摘した好論で、世阿弥の読み直しともなっている。第九章は、六

輪一露の円相と剣の図の背景として、密教神道の麗氣灌頂の教説およびイメージを考えている。六輪一露説ははじめから禅竹のオリジナルとして提示されておらず、東大寺戒壇院の志玉（華嚴学の巨匠であるとともに律僧でもある）の注が加わって複数の著者のものとして提示されている。第十章では、六輪の始めの寿輪と終りの空輪についての志玉注が、澄観の法界思想を基礎としており、この枠組みが六輪におけるウロボロスの円環の構想に影響を与えたことを述べている。第十一章は、今まで未解明だった「覚大師云」として記される文句の典拠を、天台の教説に見出したものであり、第十二章は、「一露」の概念について、志玉の道歌から新しく見直すものである。

第十三章「禅竹能楽論における『一露』と胎生学」が、第二部の「荒神」論との関わりが濃厚に見出だされる最終章である。いくつかの中世の音律理論書には、音の発生を身体内部に求める胎生学的な言説が見られ、そのような思想をくぐり抜ける中で禅竹の「一露」や「一水」の概念が生み出されてきた可能性が示され、それは胞衣神としての荒神の言説とも強く結びついていることが示される。

高橋論文に関しては、金春禅竹のテキストの解体研究・注釈研究としては前人未踏の境に遊んでいて大変優秀であるが、それらが禅竹思想の本質論へと統合されていないという欠点も指摘された。前半の荒神論は新しさはあるが、個々の資料の精査が不十分な点もあり、荒神という神格の統合的研究になっていない弱点や後半部との接合の弱さも指摘された。しかしながら、本論文が従来の金春禅竹の思想研究の地平を大きく更新する新たな基礎的研究であることでは五人の審査委員は一致した。

以上により、本審査委員会は本論文を博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。